

旅行中の「お薬手帳」携帯状況に関する調査研究

宮本 悦子*、鈴木 あずみ*、鈴木 雅弓*、毎田 千恵子*、
興村 桂子*

The Questionnaire Survey about Carrying Medication Notebooks on a Travel

Etsuko Miyamoto*, Azumi Suzuki*, Ayumi Suzuki*, Chieko Maida*
and Keiko Okimura*

Received December 9, 2013

Abstract

“Medication Notebook” is a useful tool in “Pharmacy-Pharmacy Cooperation” between pharmacists in hospitals and pharmacists in pharmacies. However, both the patient and the medical worker do not understand it enough.

In this study, about the name recognition and the portable situation of the medication notebook, we performed the questionnaire for the pharmacy students and a traveler.

Although the student's recognition was high enough, the everyday portable rate was low. Especially, the degree of carrying the medication notebook under travel was 10% or less. In many cases, they saved with the insurance certificate and the patient's registration card and did not fully understand the role of the notebook. On the other hand, 50% of the travelers carried the notebook at the time of a travel, although name recognition was about 40%.

Although the notebook of the electronic edition was being created in Japan now, that to fully argue about a form or the contents is required suggested these results of an investigation.

はじめに

「お薬手帳」は、1990年代に埼玉県朝霞地区において「おくすり手帳（薬識手帳）」^{1,2)}としてスタートし、薬・薬連携ツールとして広く普及してきたが、その有用性・重要性は、東日本大震災の医療活動において改めて認識されることになり、平成23年度「薬と健康の週間」において、都道府県薬剤師会が実施した統一キャンペーンでは、「お薬手帳」の啓発活動（43件／95件）が最も多かったことが報告されている。^{3,4)}また、本年11月に報告さ

*薬学部 Faculty of Pharmaceutical Sciences

れた「2012年薬局ヒヤリ・ハット報告事例」では、お薬手帳の確認により、重複投与が回避できたなどのお薬手帳の重要性を指摘している。⁵⁾

現在、IT技術の進歩とともに電子媒体を利用したツールも試験段階ではあるものの利用されはじめている。医療情報化に関するタスクフォース（政府政策会議）では「どこでもMY病院」構想の具体化策として日本薬剤師会から「電子版お薬手帳の現況」⁶⁾が提供される一方、「国民参加の場」を統括する厚生労働省アフターサービス推進室活動報告には、最近の「お薬手帳」事情について電子媒体も含めた詳細な調査状況が報告され、その存在意義はますます大きくなってきている。⁷⁾

手帳の認知度や普及率は向上しているものの患者個々には、十分に理解されていないこと、また、医療者側においてもその活用が不十分であることが指摘されており、これまでも手帳の携帯率の向上を目的とした活動や医師、薬剤師などの医療従事者への利用状況のアンケート調査を通じての啓発活動が展開されてきた。⁸⁻¹⁴⁾

これまでの調査は、主に来局する患者を対象に実施された場合が多いことから、今回、将来、薬剤師としてお薬手帳と多くの関わりを持つと思われる本学薬学生および市中で協力の得られた一般人を対象とし、旅行時の対応に注目し、「お薬手帳」の携帯状況についてアンケート調査を行った。また、あわせてその理解度についても調査し、今後の啓発活動の在り方を検討した。

方法

調査期間及び調査対象：本学薬学部に在籍する学生、職員及び街頭等（金沢駅、旅行社への依頼）で協力の得られた一般人（旅行者を含む）を対象に実施した。学生については学年進級に伴う変化もあわせて調査した。回答者数を表1に示す。なお、帰省中と回答した一般人4名については旅行者として取り扱った。

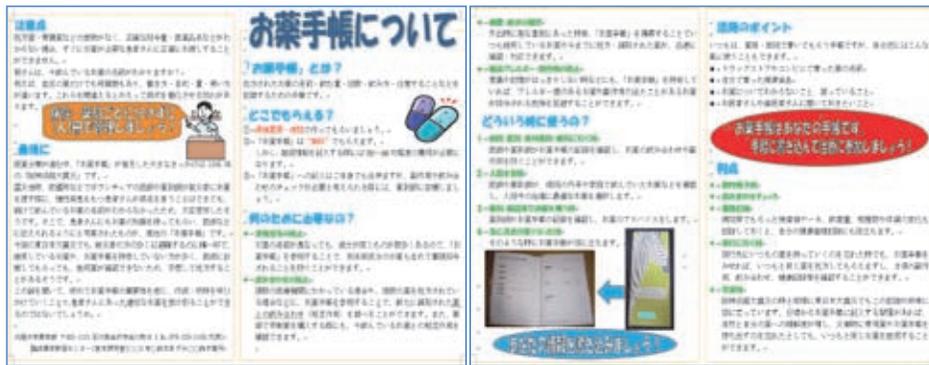
表1 お薬手帳に関するアンケート調査の回答者数

調査対象	平成 23 年度 ¹	平成 24 年度 ²	平成 25 年度 ³
1 年次生	131	—	—
2 年次生	88	—	—
3 年次生	101	89	107
4 年次生	117	79	—
5 年次生	198	—	—
6 年次生	120	159	—
小計	755	308	107
職員	53	—	—
一般人(旅行者)	183 (132*)	—	—

¹ 2011 年 7 月, ² 2012 年 6~10 月, ³ 2013 年 10 月. *旅行中または帰省中

調査方法及び調査項目：調査目的を口頭または文書で説明した後、アンケート用紙を配布し、回答を依頼した。回答は自己記入方式とした。調査項目は、「お薬手帳」について「知っているか」、「持っているか」、「日常あるいは旅行中持ち歩いているか」、「必要であると思うか」などとした。また、簡単な啓発用リーフレット（A4 両面；図1）を作成し、回答者に対し、配布した。なお、平成 23 年度の調査において携帯率が低かったことから、平成 24 年度、25 年度に一部の学生を対象に「お薬手帳」の保管状況、「保険証」の携帯状況などについて改めて調査を行い、経年的な変化について比較を行った。

図1 配布用リーフレット「お薬手帳について」（作成：鈴木あずみ、鈴木雅弓 2011, 6）



結果

お薬手帳の認知度について

お薬手帳の認知度（%）について、平成 23 年度の調査結果を表 2 に示すが、認知度は、一般人 40%に比較し、薬学生 86%と有意に高く、特に 5、6 年次生では全員が「知っている」と回答した。また、「名前だけ知っている」と回答した人を合わせると 4 年次生以降全員が認知していた。ついで、「知っている」あるいは「名前だけ知っている」と回答した人に対して、「どこで」あるいは「何で知ったか」について問うた結果（複数回答可）を表 3 に示すが、認知度に関わらず、学生と一般人ともには約 60%が「薬局」、次いで 20%が病院と回答した。学生においてはその他において「講義」との回答がもっとも多く見られた。薬学生の場合、医療系の講義や実習において、履修する機会が多く、認知度が高かったものと推定される。

表 2 お薬手帳の認知度について (%)

回答者*	知っている	名前だけ知っている	知らない
1 年次生	66.4	21.4	12.2
2 年次生	68.2	19.3	12.5
3 年次生	74.3	16.8	8.9
4 年次生	94.8	5.2	0
5 年次生	100.0	0	0
6 年次生	100.0	0	0
全学年	86.2	9.0	4.8
職員	94.3	5.7	0
一般人	56.3	9.8	33.3
旅行者	35.6	22.7	41.6

*平成 23 年 7 月調査時

表 3 「お薬手帳」をどこで知ったか、または何で知ったか。人数 (%)

調査対象*	病院	薬局	ポスター・TV ・雑誌	その他*
1 年次生	25 (21.7)	66 (57.4)	12 (10.4)	34 (29.6)
2 年次生	22 (25.0)	57 (64.8)	8 (9.1)	8 (9.1)
3 年次生	14 (13.9)	63 (62.4)	7 (6.9)	20 (19.8)
4 年次生	16 (13.7)	68 (58.1)	7 (6.0)	57 (48.7)
5 年次生	65 (32.8)	157 (79.3)	21(10.6)	142 (71.7)
6 年次生	28 (23.3)	88 (73.3)	6(5.0)	35 (29.2)
全学年	170 (22.5)	499 (58.1)	61 (8.1)	293 (39.2)
職員	12 (22.6)	24 (45.3)	8 (15.1)	20 (37.3)
一般人	10 (29.4)	20 (70.6)	2 (5.9)	3 (8.8)
旅行者	25 (32.5)	45 (58.4)	9 (11.7)	0 (0)
小計	35 (31.5)	65 (58.6)	11 (9.9)	3 (2.7)

複数回答可 *平成 23 年 7 月調査時

お薬手帳の所有状況について

表 4 には旅行中に病院や薬局などを利用した状況を調査した結果を示すが、学生、一般人を問わず、3 割以上が利用したことがあると回答した。そこで、まず、お薬手帳の所有状況について確認したところ、30%以上が所有しており、学生では学年進行とともに携帯率は上昇していた (表 5)。この結果は、来局による患者に対する年代別普及状況の調査と

比較し、ほぼ同程度であった¹¹⁾が、複数冊(1~3冊)を所有していると回答した割合は、学生、一般人を問わず10%を超えていた。学生においては、1冊の手帳への服薬情報等の集約の必要性について早くから講義されていると考えられるが、経年度(平成23年~25年)の調査からは十分な理解が得られていないことが推察され、講義科目間の連携の強化の必要性が示唆された。

表4 旅行中に病院、薬局、ドラッグストアに行ったことがありますか(%)

調査対象*	H23年度		内訳(%)		H24年度	H25年度
	はい(%)	病院	薬局	ドラッグストア	はい(%)	はい(%)
1年次生	39.7	9.2	9.2	26	—	—
2年次生	33.0	6.8	12.5	19.3	—	—
3年次生	28.7	7.9	6.9	16.8	24.7	18.0
4年次生	30.8	6.8	5.1	23.1	12.7	—
5年次生	37.9	6.1	6.6	19.7	—	—
6年次生	34.2	5.0	5.8	29.2	25.2	—
全学年	33.6	6.9	7.4	22.4	—	—
職員	66.0	9.4	17	50.9	—	—
一般人(旅行者含む)	40.8	8.2	8.2	13.0	—	—

*平成23年度調査時

表5 自身のお薬手帳を持っているか、何冊持っているか(%)

調査対象	H23年度(%)		H24年度(%)		H25年度(%)	
	はい	複数冊	はい	複数冊	はい	複数冊
1年次生	27.4	13.9	—	—	—	—
2年次生	35.2	12.9	—	—	—	—
3年次生	39.6	16.7	48.3	4.7	41.0	11.0
4年次生	44.4	3.9	45.6	13.9	—	—
5年次生	46.0	11.2	—	—	—	—
6年次生	55.0	13.4	56.0	11.2	—	—
全学年	41.9	13.3	—	—	—	—
職員	26.4	27.2	—	—	—	—
一般人	41.1	15.0	—	—	—	—
旅行者	33.3	10.0	—	—	—	—

お薬手帳の携帯状況について

「お薬手帳」の携帯状況（表 6）については、常に持ち歩いていると回答した割合は一般人で 14%と最も高く、学生では 6 年次で 10%を超えるに留まった。旅行中の携帯状況は、一般人、旅行者とも 50%近くが携帯していると回答する一方、薬学生では日常同様に低い携帯率を示しており、薬学生では、日ごろの講義等で知識はあるものの、十分に活用されていないことが示唆された。

表 6 お薬手帳を携帯しているか (%) *

調査対象	H23 年度 (%)		H24 年度 (%)		H25 年度 (%)	
	日常携帯	旅行時携帯	日常携帯	旅行時携帯	日常携帯	旅行時携帯
1 年次生	5.6	8.3	—	—	—	—
2 年次生	0	9.7	—	—	—	—
3 年次生	0	7.3	4.7	9.3 (7.0) **	5.0	5.0 (11.0) **
4 年次生	5.8	3.9	5.6	11.1	—	—
5 年次生	3.3	5.5	—	—	—	—
6 年次生	10.6	10.6	4.5	1.1	—	—
職員	8.3	0	—	—	—	—
一般人	14.3	47.6	—	—	—	—
旅行者	6.8	50.0	—	—	—	—

*自身の手帳を持っていると回答した人数に対する割合、** () : ときどき携帯

「お薬手帳」の所有率が低い点について、保険証や診察券などと一緒に保管していることが推測された。厚生労働省は健康保険証について、従来の世帯単位で交付している健康保険証をすべて個人単位のカードに切り替え、個人単位にすることで受診しやすくした。また、医療機関の診察券も大半がカード化されている。そこで、医薬品情報関連の実習開始前の 3 年次学生を対象に保険証の携帯状況も含めてアンケート調査（H24 年度、H25 年度）を行った。その結果、「お薬手帳」について、所有者していると回答した 30%が保険証や診察券と保管していると回答した。

保険証の携帯状況（日常及び旅行中）は、H24 年度 63%（H25 年度 91%）であり、4 年次 67%、6 年次生 63%と他学年においても高い傾向にあった。そこで、お薬手帳についても、「カードサイズ」の電子媒体であれば携帯するかの問うたところ、44%（H25 年度 56%）が常に携帯すると回答した。しかし、30%（H25 年度 25%）は受診時のみと回答した。「お薬手帳」は、国の施策により電子化が検討されていることから、あらためて電子媒体の様式について尋ねたところ、56%がカードタイプを選択し、携帯電話（アプリ）の利用は 16%に留まった。

お薬手帳の必要性について

「お薬手帳」の必要性について問うたところ、平成 23 年度では学生では、90%以上が必要と回答し、一般人（旅行者含む）に比較し、高い傾向にあった（表 7）。また、旅行者を含む一般人において、お薬手帳を所有していない場合、70%以上の人で持ちたいとの回答が得られた。手帳の必要性がないとの回答をした中には、ほとんど医療機関にかかることがないとの記載が複数に認められ、手帳の役割について十分な理解が得られていないことが示唆された。

表 7 お薬手帳は必要であるか (%)

調査対象	H23 年度		H24 年度	H25 年度
	必要	持ちたい*	必要である	必要である
1 年次生	88.5	57.0	—	—
2 年次生	88.0	61.7	—	—
3 年次生	91.0	60.0	66.0	67.0
4 年次生	95.7	57.5	84.8	—
5 年次生	97.4	58.5	—	—
6 年次生	92.4	44.2	72.3	—
職員	92.2	46.9	—	—
一般人	56.9	80.0	—	—
旅行者	31.1	68.8	—	—

*自身の手帳を持っていないと回答した人数に対する割合

まとめ

今回のアンケート調査結果から、多くの人を手帳の存在を理解していたが、受診の機会が少ない人の場合には、その役割についての知識は不十分であることが示唆された。この点については、お薬手帳について、知る機会が少ないことも一因であると考えられる。震災をきっかけに自治体には、医師会、薬剤師会などが中心に全県民に配布するなどの取り組みが認められている。また、日常の健康手帳として取り入れるなどの工夫もなされているが、薬剤師会など医療関係者が協力し、キャンペーンなどを通じて周知していくことが必要である。また、手帳の様式や記載方法・内容についての改善が必要である。

先述したが、現在、経済産業省、厚生労働省は、「お薬手帳」の電子化へ仕様統一に向けて、日本薬剤師会と連携し、患者の処方薬歴などをインターネット上で確認できるような「電子版お薬手帳」の導入を支援する準備を進めており、ネット上で閲覧できる患者情報の種類などの仕様を示す予定である。お薬手帳の利用は、医療機関において患者情報の一元管理に活用されていたが、最近では、院外処方せんに検査値などの患者情報が付記され

るなど、薬・薬連携が一段と進められている。¹⁵⁻¹⁸⁾また、在宅医療が進む今日、薬局においても患者情報の収集、共有に向けて利用が進められている。¹⁹⁻²²⁾オフラインで使用可能な紙媒体は必須であることも配慮し、全国で統一様式による電子化に対応できることで日常や旅行中での有用性が更に増すことが期待される。

謝辞

アンケート調査の実施にあたり、回答にご協力いただきました皆様に深謝いたします。また、金沢駅（石川県）での調査を許可いただきました金沢市道路管理課並びに調査にご協力いただきました旅行社の関係者の皆様、本学アドミッションセンター伊藤孝治氏に感謝いたします。

本調査の一部は、鈴木あずみ、鈴木雅弓両名の平成 23 年度総合薬学研究の一部としてなされたものです。アンケート項目、リーフレット作成の検討にご協力いただきました北陸大学薬学部宮本研究室の皆様へ感謝いたします。なお、本論文の内容の一部は第 45 回薬剤師学術大会（2012 年 10 月、浜松）において発表しております。

引用文献

- 1) 小田美良, 朝霞地区薬剤師会のおくすり手帳の歴史, 調剤と情報, **12**, 146-149(2006).
- 2) 漆畑 稔, お薬手帳の意義, 調剤と情報, **12**, 142-144(2006).
- 3) 日本薬剤師会編, 被災地における薬剤師の活動, 東日本大震災における活動報告書 平成 24 年 3 月.
- 4) 平成 23 年度「薬と健康の週間」における全国統一事業結果について, 日薬業発第 12 号平成 24 年 4 月 5 日.
- 5) 薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業平成 24 年 年報, お薬手帳及び薬剤情報提供書に関するヒヤリ・ハット, 公益財団法人日本医療機構評価機構医療事故防止事業部 (2013, 11.28) . http://www.yakkyoku-hiyari.jcqh.or.jp/pdf/year_report_2012.pdf
- 6) 日本薬剤師会編, 「どこでもMY病院」構想の具体化～電子版お薬手帳の現況～, 第 12 回医療情報化に関するタスクフォース (政府政策会議), 医療情報化に関するタスクフォース高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部 2012 年 2 月 13 日. <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/iryoujyohou/dai12/siryou7.pdf>
- 7) 国民参加の場,アフターサービス推進室活動報告書, vol.10:2012 年 12 月; 厚生労働省 (2013, 1.11) <http://www.mhlw.go.jp/iken/after-service-vol10.html>.
- 8) 足立哲夫, 丹羽孝司, 田頭正至, 窪田傑文, 鎌田久代, 原 宏和, 平野和行, 岐阜薬科大学附属薬局における「お薬手帳」の利用状況, 医療薬学, **28**, 164-171(2002).
- 9) 藤崎博子, 及川孝司, 岩尾一生, 関川 彬, 遠藤 泰, 北海道医療大学医科歯科クリニック薬剤部におけるお薬手帳の活用とリスクマネジメント機能の評価, 医療薬学, **31**, 475-482(2005).
- 10) 日本薬剤師会編, 調剤と情報編集部, お薬手帳活用の現状—患者アンケートから見たこと—, 調剤と情報, **12**, 160-163(2006).
- 11) 柴田佳子, 藤沢美和, 針田昌子, 安田幸子, 高谷和男, 年代別によるお薬手帳普及状況から見えてきたもの, 第 41 回北陸信越薬剤師会学術大会, <http://nanohana-pharmacy.com/g20082/> (2008, 11.3, 金沢).

- 12) 飯嶋久志, 安藤秀人, 井伊正巳, 伊藤 均, 石井一昭, 千葉県薬剤師会会員薬局における医薬品情報源とお薬手帳の活用に関する調査, 医療薬学, **29**, 544-551(2003).
- 13) 小嶋文良, 武田直子, 武田真美子, 櫻井可奈子, 半田貢康, 相原由香, 峯田 純, 新田幸男, 伊藤順子, 岡寄千賀子, 仲川義人, 渡辺康弘, お薬手帳の活用度調査, 第4報: 山形市内の医師に対するお薬手帳の認識と活用に関するアンケート調査, 医療薬学, **33**, 54-59(2007).
- 14) 田中直哉, 小椋章次, 近藤澄子, 田中秀和, 佐藤 均, お薬手帳携帯率の向上を目指した情報シールの開発とその評価, 医療薬学, **33**, 958-966(2007).
- 15) 保坂恵玲, 高柳理早, 鈴木あやな, 折井孝男, 滝野敏一, 清水秀行, 山村喜一, 中村幸一, 小滝 一, 澤田康文, 伊賀立二, 医薬品適正使用のための処方薬剤情報提供の有用性と評価—「お薬手帳」を利用した処方情報の一元管理の有用性とその評価—, 病院薬学, **23**, 342-347(1997).
- 16) 渡辺法男, 山村恵子, 玉置紀子, 山川真名美, 西田幹夫, 桜井恒久, 鍋島俊隆, 「お薬手帳」を利用した入院患者に対する服薬指導の評価, 病院薬学, **25**, 34-39(1999).
- 17) Masato Shintosh, Seigo Iwakawa, Youko Shimada, Masanori Fujita, Kazuyuki Sugahara, Ken-ichi Konishi, Effects of Pharmacists' Consultation on Serum Cholesterol Level Using Drug History Notebook or Drug Instruction Sheets for Outpatients with Hypercholesterolemia, *Jpn. J. Pharm. Health Care Sci.*, **27**, 337-342(2001).
- 18) 平野和裕, 江本晶子, 田崎正信, 中野行孝, 藤戸 博, 半分割された錠剤の持参薬確認に及ぼす影響, 医療薬学, **36**, 252-261(2010).
- 19) 前東憲子, 「お薬手帳」による薬・薬連携～「在宅医療希望患者のための医療連携」構築への参画, 医療ジャーナル, **38**, 2687-2692(2002).
- 20) 飯嶋久志, 石野良和, 安藤秀人, 茂木 博, 薬局における患者情報の入手方法と活用に関する調査, 医療薬学, **31**, 223-227(2005).
- 21) 柴田由香里, 河内明夫, 田口順子, 首藤博子, 原田勝己, 本屋敏郎, レセプトコンピュータ薬剤監査システムを用いたお薬手帳鑑査の有用性検討, 医療薬学, **34**, 972-976(2008).
- 22) 土井信幸, 坪井 賢, 中澤 巧, 中野宣範, 保険薬局における夜間 24 時間対応の問い合わせ内用の推移から評価したお薬手帳の適正使用による有効性, 医療薬学, **38**, 204-209(2012).